宇都宮市教育センター **かすたネット通信** 第４６号
令和6年6月17日発行
発行者　所長　飯田 高広

不適切な行動が目立たない授業づくり

指示が通らず，平然と学習に取組まない子がいる中で授業を行うのは，辛く，やるせないものです。こうした子は，発達や愛着の問題の有無にかかわらず，学習や授業あるいは教師に対してネガティブな感情を抱き，それが行動に表れていると考えられます。おそらくは「つまらない（我慢ばかりで窮屈だ・易し過ぎる）」「退屈だ（進みが遅い・待ちが長い）」「分からない，できない」といった思いでしょう。こうした子がいる状況をどう受け止め，授業づくりに生かしていくかが，この先の子どもや学級の在りようを左右することになります。

対応の視点は，次の２つに整理されます。

１つは，情緒不安定，行動コントロール力の未熟さ，未学習・誤学習など，その子が抱える問題に対して，状態や特性に応じた指導へと変更・調整を行う**「合理的配慮」**，もう１つは，特定の子に限らず，全ての子にとってより分かりやすくなるなどメリットがあり，学びの質を向上させる**「授業のユニバーサルデザイン化」**の取組です。

授業に真面目に取り組む子の中にも，「つまらない」「退屈だ」「分からない，できない」と感じている子はいるものです。特に多いのは，授業のほとんどが，教師の話（説明），子どもとの一問一答のやり取り，ノートやプリントへの記入に費やされる授業の場合です。

しかし，大半の子は「この先生の授業はこうだから」で済ませてしまうため，教師は気付かないまま，子どもの順応性に寄りかかった授業に終始しやすいのです。

と言うことは，感じるままに反応する子は，授業改善の必要性を感知して警報を鳴らすセンサーの役割を果たす存在なのかも知れませんね。

熱中して長くのめり込む活動を除けば，ある程度の時間を頑張ったらしゃべりたい，動きたい，別のことがしたいのが子どもです。45(50)分間座り続け，集中を切らさずに学び通すのは，かなりハードルが高いことです。そこで，「宇都宮モデル」に沿った授業展開を前提としつつ，以下の点も踏まえた授業を行う必要が生じてきます。

- 見る，聞く，書く，考えるなどの**“静”の活動と**，話す・話し合う，読む，動作で表現する，歩きながら見聞きして回るなど**“動”の活動を組合せ，展開に変化をもたせる。**
- 集中力が鈍り，**落ち着かなくなる前に次の活動を提示，導き，目先を変える。**
  …次の活動との間に，気分転換や集中力回復のため，背伸び・ストレッチや簡単な手遊びゲームなどを全員で１，２分行う方法もあります（ＴＶのＣＭの発想です）。
- **協働学習**（ペア，グループ活動）**を意図的・積極的に取り入れ**，学習に参加しやすくする。
  …活動の目的・内容（方法），役割分担，ルールなどをよく練っておきます。騒がしくならないように“声のものさし”を活用するなどして指導します。小学校低学年からの積み上げ（協働学習への慣れとその良さを感じていること）が極めて重要です。コミュニケーションが苦手な子にとっては，ストレスになる場合があることに留意します。

このような授業展開によって，「姿勢を正しなさい」「静かにしなさい」「勝手に出歩きません」などの注意を減らすことができます。**注意・叱責の対象となる行為を，学習を進める上で欠かせない行為に転換する**ということです。

担当　学校生活適応支援アドバイザー（飯山･大瀧）
TEL　639－4392